Tojo, Misao
Kokugo hogengaku Honshu seibu no hogen

国語方言学

本州西部の方言

東條操

國語科學講座

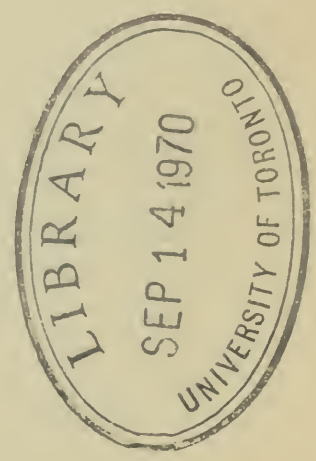
— VII —

國語方言學

本州西部の方言

東條　操

株式會社
明治書院

目次

本州西部の方言

東條操

第一章　東西方言境界線

玆に本州西部の方言と題して記述する方言は、近畿地方・中國地方・四國地方の外に、本州中部地方に行はれる方言にまで及ぶものである。近畿地方・中國地方・四國地方の方言を一括して本州西部方言と總稱することは、世間の上方言葉又は關西方言と云ふ意識にも略一致して居つて多くの人の首肯する事と思ふが、本州中部地方の方言を加へた事については、全く便宜的の取扱である事を最初に御斷りしたい。これは國語方言學の分册を定める時に、本州東部・本州西部・九州と三部に分けた爲に、東部方言と西部方言との中間地帯とも云ふべき本洲中部方言を何れかに附說するの止むなきに至つた結果である(この地方の方言の記述だけで一分册を作る事も不穩當である)。東部に東北と關東との二方言を收めた關係上、本册に中部地方の方言を說く事としたのである。序說として、この中部方言に關聯してまづ東西方言境界線について一言する。

本州中部方言中で、富山以西の北陸道の方言は極めて近畿方言に近いものであつて、これを西部方言と見る事は不當でない。旣に國語調査委員會の口語法調査報告書の口語法分布圖概觀中に方言區劃に言及して、

假ニ全國ノ言語區域ヲ東西ニ分タントスル時ハ大略、越中飛驒美濃三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ、以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ

と記した後で、

前項ノ境界線ハ北陸道方面ニ於テハ概シテ比較的ニ固定スルガ如クナレドモ東海道方面ニ於テ移動スルコト頗ル多ク尾張三河遠江ノ如キハ屢々其所屬ヲ變ズルコトアリ、又東山道方面ニ於テモ多少ノ出入アリテ南信飛驒美濃ノ如キハ或ハ東方ノ領域ニ入リ或ハ西方ノ領域ニ入ルコトアリ尙ホ越後信濃甲斐駿河等ノ西方ノ所屬トナリ近畿諸地方ノ東方ノ所領トナルコトアリ……然レバ北陸道殊ニ越中及ビ越後、東山道ノ中信濃(殊ニ南信)及ビ美濃、東海道ノ中箱根以西(殊ニ遠江三河尾張)等ハ向後、以上ノ見方ヨリノ周密ナル調査ヲ要ス。

と述べてある。北陸方面の東西境界線については「國語と國文學」第四卷第九號に田村榮太郎氏が越中方言の地位附北陸道の東西方言分界線と云ふ論文を掲げ、訛音・敬語・時法の三觀點から見ての調査が掲げてあり、その敬語の調査について氏は、

大體、北陸は類似のものである。……而して關西の敬語が使はれて關東の敬語が少い。

と云ふ結果をあげ、東西語法の二三の對峙については次の如く述べてある。

過去の思ウタは入善(富山縣)以東に少く、打消の着ンは富山以西に多く、着ネエは高田邊まで行かなくてはない樣である。又

東北系統の命令形のロも高田以西にはない。

富山以西の北陸方面が大體西部方言である事は略、知る事が出來る。

然らば東山・東海方面に於てはどうかと云ふと、東山の方言については北信に關東の色彩が多く南信に關西の色彩が多いと信ぜられて居る。また美濃は大體關西に近く、甲斐は關東に近いやうである。たゞ甲斐は郡内地方を除いては打消の形式は「行カン」「行カナンダ」で全く關西式である。この東山道方面を特に精査した人は無い。

東海道方面に於ける東西兩方言の勢力の消長については既に本講座の方言學概說の三十頁に述べた通り、「ベイ」は富士川にて其影を沒し形容詞副詞形「善ク」、打消の「ナイ」、命令の「ロ」は遠江を西境とし、三河に入れば「善ウ」「ン」「ヨ」が之に代つて現はれる。然るに指定の「ダ」や促音の音便形「拂ツタ」などは愛知全縣になほ行はれて居り之が「ヤ」となり「拂ウタ」と云はれるのは多くその以西である。またアクセントについて服部四郎氏は「音聲の研究」第三輯所載の近畿アクセントと東方アクセントとの境界線なる論文に於て、

長島(愛知)と桑名(三重)はその間に揖斐川を隔てて居るだけであるが兩者間にはアクセントの著しい相違が見られる。

と云はれ、ここにその境界線を求めんとして居り、「土の香」第五周年記念號の「方言境界線の問題について」と云ふ論文に於ても、

三重縣北部の桑名の方言と長島の方言との間には近畿方言と東京方言とのアクセントの相違にも匹敵するアクセントの相違が存する。卽ちこの地方に於ては兩者の間を流れる揖斐川に著しい方言境界線が存すると云はなければならない。更に興味あるはそれより少し北の三重岐阜の縣界地方であつて……縣界より南十町餘の香取(三重縣)は純粹の近畿アクセント、南五丁の柚

非(三重縣)も大體近畿アクセントなるに、それより北十町餘の田鶴(岐阜縣)は完全に近い東方アクセント、田鶴の東十丁足らずして東平賀(三重縣)は多少不純ではあるが近畿アクセントの系統のものが行はれてゐる。……尙次の點に注意すべきである、境界線近くの東方アクセントの行はれてゐる地方では「カツタ」(買)の如き促音便形及び指定の助動詞「ジヤ」が普通用ゐられ、近畿アクセントの行はれてゐる地方では「コータ」(買)の如きウ音便形及び指定の助動詞「ヤ」が用ゐられる。

と云ふ事實を擧げて平坦地に劃された縣界に方言境界線のある事を驚くべき事實として指摘してゐる。氏はかくて愛知・三重の縣界に東西方言の境界線を認めんとするもののやうで「音聲の研究」第四輯八十頁には、

美濃三河の東境附近を方言上の大きな境界線とするよりも上述のアクセント境界線を以て之に當てる方が妥當であると思ふ。

と述べた。

然るに一方、濱松師範の宇波耕策氏は「土のいろ」特輯の遠州方言研究に濱名湖と方言分布なる一文を投じ、其中で

濱名湖を中心にして湖東では本州東部方言に屬するものを使用し、湖西では本州西部方言に屬するものを使用し、さうして湖北では緩衝地帶として東西兩方言が交錯し兩方言を併用するといふ現象の實例はいくつも拾ふ事が出來る。「よく見える」「よう見える」に於て湖東では「よく」、湖西では「よう」、さうして湖北では兩者を併用してゐる。……「人がゐる」「人がをる」の對立、「立つてる」「立つとる」の對立は略、同樣であるが、「雨が降らない」「雨が降らん」の二形式に於ては「降らん」の形式は全湖岸にゆき渡り「ふらない」の形式はたゞ「ふらん」の形式に併用されて湖東地方に存するに過ぎない。中には全湖岸にわたつて東西兩形式の併用されてゐるものもある。「讀ました」「讀ませた」の如きは卽ちその例である。

と述べた。更にアクセントについても「土のいろ」遠州方言研究號第二輯に「濱名湖とアクセントの分布」と題し其中で

アクセントの分布について大體木曾川が一つの大きな境界線をなしてゐるといふ事である。さうすると濱名湖沿岸は大體東部のアクセントに屬することになる。これを實際について見ると……濱名湖沿岸地方は必ずしも關東地方と同一でない。さうするとある單語のアクセントに就いては濱名湖が東西アクセントの境界線になつてゐることもあるかも知れない。

と述べ、各種の實例をあげて、

以上の分布狀況について見るに境界線は移動してはゐるが大體、湖水を中央にして東西に區劃してゐるのである、要するに濱名湖といふものの存在は語彙・語法の分布と同じくアクセントの分布をも區劃する原因をなして居るのである。

と結論してある。氏の調査例は三音節語が多く、湖東、下上中型に對し湖西、上中中型を示すものである。とにかく或種の語のアクセントが濱名湖を境界として對峙してゐる事が分る。

東海道に於ける東西方言の分布は上記の如く複雜を極め錯綜してゐるが、古來、遠參の境を以て風俗言語の分岐點と見なして居た。濱松を西に可美村に入る八丁畷をその境界とする說もある。東海道も富士川までは關東の色彩が濃く、大井川・天龍川と越すに從つて漸く西部の形式を混じ、濱名湖の今切を越せば著しく西部方言的となるので、東西方言の境界線を設くるならば、やはり遠參の境に置くべきものと思はれる。萬葉集の東歌に遠江歌の入つてゐる事を考へるとこの線の歷史的重要性が分る。

物類稱呼に美濃尾張と山城近江とを言語の境界とし、東海道にては桑名をその境界とする說が見える。特に津田正生の尾張地名考卷一には「伊勢近江西美濃越前加賀より西南の國は西國音なり、また尾張東美濃飛驒越中より東北は東國音なり、東西の聲音は上聲と去聲と反へり」と見える。之はアクセントに着眼した說であらう。

第二章　中部方言

中部方言とは北陸に於て富山石川福井の三縣、東山に於て山梨長野岐阜の三縣、東海に於て靜岡愛知の二縣の方言を總稱するものである。この中部方言地方は前章に述べた如く本州東部方言地方と本州西部方言地方との中間地帶に位する爲に兩方言の影響をうけて居る地方であるが、北陸は頗る西部方言的であり、東山東海は之に比べて寧ろ東部方言的と云へる。從つて之を北陸と東山東海との二區に分ける事が便利である。近畿方言との關係上、先づ東山東海區を說き、次に北陸區に及びたい。

〔一〕東山東海區方言

研究・文獻　本區の方言は相當に調査されて居る。特に東海道には豐富な材料がある。一々の方言書や論文を擧げる餘白はないが、その主要な業績に就て一言して置く。靜岡縣方言に關しては明治三十年代に新村博士や保科教授の調査があつたが、その稿本が東大國語研究室で震火で亡びたのは誠に殘念な事である。また遠江方言に就ては松下博士が遠江文典と云ふ研究を脊て「新國學」に連載された事があり、標準口語法の中にも方言を引用された條がある。刊行書では靜岡師範と靜岡女子師範の共同調査になる靜岡縣方言辭典は有名である、たゞ同書には地名の記入が省いてあるが、男子師範に保存されて居る原本には一々の記入がある。近くは靜岡縣方言集を出した內田武志氏の研究が注意すべきものである。遠江方言については三回まで遠州方言研究の特輯を出した「土のいろ」社の飯尾氏の功績は沒すべからざるものである。同誌の佐々木淸治氏の遠州の方言地域や丁斑魚考は、宇波耕策氏の濱名湖と方言分布に關す

る論文と共に注意すべきものである、濱松師範では宇波教諭の指導の下に語法形式の分布を調査した事がある。筆者も靜岡の單語・音韻・語法分布については之を調査した事がある。

愛知縣では岡田稔氏が昭和六年に尾三方言研究會の設立を計畫され同氏の方言研究の業績は今後公にされる事と思はれる。一方、加賀治雄氏の「土の香」社で「尾張の方言」を編纂されるに當り、その續篇に山本格安の「尾張方言」や石井垂穗の「水がはり」の如き舊幕時代の稿本を收めた事は特筆してよい。刊行單行本では愛知女子師範郷土研究紀要第一輯、愛知縣方言集は前の靜岡縣方言辭典にも相當すべきものである、編纂者は黒田鑛一氏である。個人としては南知多方言集や名古屋方言の語法の著者鈴木規夫氏の業績と、東三河方言の調査をした谷亮平氏とを擧ぐべきである。名古屋方言については吉澤博士の方言調査報告もあつたが之も東大の國語研究室で震火の爲に灰となつた。

次に山梨縣方言は研究された物が少なかつたが、昭和九年に羽田一茂氏と石川綠泥氏との方言集が公にされた。外に、山梨女子師範の山田正紀氏が發表された山梨縣方言の諸相は山梨方言の言語地理學的研究で頗る有益である。

長野縣には早くから方言調査が起つて明治三十年から四十年にかけてかなりの方言書が出ては居るが近來、全く振はない、昭和七年に上田中學から出版した信州上田附近方言集も舊版の增補に止まつたのは殘念である。從つて同縣の音韻や語法の分布狀態はまだ明かでない。東筑摩郡から音韻及口語法に關する調査書が刊行されてゐる位な程度である。

岐阜縣も、長野縣に似て明治卅年代に若干の方言集が出て居るが音韻や語法については「大野郡口語法並に音韻調査」が公刊されてゐるだけで全縣の分布は明瞭でない。近く出た瀨戸氏の岐阜縣方言集成も單語集であり、郡別では

あるが重出した單語を省いた爲に言語地理學的調査には利用出來ない。

飛驒については新村八杉兩博士の白川村の調査報告が國語研究室にあつたが之も燒亡し、荒垣氏の北飛驒の方言があるだけである。

長野岐阜の如き重要な地點に言語地理學的な調査のないのは如何にしても遺憾な次第である。語法事實についてなりと先づ調査に着手したいものである。北信と南信、東濃と西濃との言語分布が明かにされる時に中部方言と關東や近畿の方言との關係が一層明かになるであらう。

音韻と語法の特徴　音韻で注意すべき現象は二重母音の轉訛と「カ」行鼻濁音の分布であらう。二重母音のアイは駿河及び甲斐ではæ:音となり、遠江三河及び長野美濃ではe:となる傾向があり、尾張では名古屋を中心とした地方にæ:音がある。

エァーチケン（愛知縣）　タケァー（高い）　オメァー（お前）　キタケァーモ（來たかえ）

「カ」行鼻濁音については音聲學協會々報第二號に石黑魯平氏の愛知縣のガ行音と云ふ研究がある。既に音韻調査書にも語間のガ行を鼻濁とするのは尾張西部と三河東南部とで愛知縣の他の地方は鼻音に發音しない事が記してあるが、氏の調査で三河の大部卽ち豐川流域以西の地方と尾張の愛知・知多・東春日井の各郡にŋ音の無い事が明かになつた。なほ面白い事は八名郡に於ては之と逆に語頭のガ行音までも鼻濁ŋとしg音を使用しない事である。之は八名郡の外、郡界に近き寶飯渥美の兩郡の一部も同樣で遠江では湖西の白須賀・新屋・新所の地方に行はれて居る。卽ち八名郡及その隣接地では語頭でもŋ音を使用するのである（山梨縣方言の諸相によれば山梨のガ行音は悉く鼻濁音の

やうに記してあるが、語頭音はgなのではあるまいか、精査したい)。また、鼻濁音の存在せぬ地方としては伊豆の西海岸をあげる事が出來る。岐阜縣にもかゝる地方があるやうであるが報告に疑はしい點があるので之も再調査したい。

語法の特徴としては未來又は意志をあらはす「ズ」を先づあぐべきであらう。「行かう」を「行カズ」と云ふ事は早くから人の注意を引いて江戸時代には之に關する記事は諸書に見え、中には不通之言也と評したものもある。之は東山東海區の殆ど全區に行はれて居る。但し種々な變形はある。東海道でも三河以西では「行カーズ」と云ふ風に云ふ例である。南信では「行カズイ」と云ひ、美濃で「行カーズニ」と云ひ、飛驒では「行カズモ」と云ふ。また之を「行カスト思ウ」と「ト」に續ける場合や、「行カスカ(イ)」と反語に云ふ場合には「ス」と清音に云ふ例である(この「ズ」は靜岡縣の富士川以東、山梨縣の郡內には無く、「ベイ」が使はれてゐる)。

この「ズ」に似た形に「ズラ」がある。之は推量の助動詞で「だらう」に相當する。東山東海區に廣く行はれて居るが北信では「ダラズ」と云ひ尾張では「ダラ」「ダラーズ」を使ふ、「來ルズラ」と云ふところを「來ルダラ」と云ふ。

推量形には「ズラ」の外に「ラ」が行はれて居る、但し「ズラ」は「雨ズラ」の如く名詞の下にも附くが「ラ」は「行クラ」「高イラ」の如く用言の下に附くばかりである。靜岡山梨を中心とし長野では南信に、愛知では三河にあるが尾張に少い。美濃飛驒にもあるが分布は明かでない。

推量の一種に「ツラ」がある。「ズラ」「ラ」は終止形につくが之は動詞の連用形に附く、之も東山 東海區に廣く行はれて居るやうである。尾張では「行ッツラ」「寒カッツラ」とも云ふが寧ろ「行ッタダラーズ」「寒カッタダラーズ」と云ふ。

標準語と違つて面白いのは愛知の「マイ」である。「行コマイ」とか「遣ロマイ」とか「起キヨマイ」とか「コ(ヨ)マイ」「セヨマイ」などと云ふが、名古屋では「マイ」が「メァー」となつて「行コメァー」「遣ロメァー」などとなる。之は打消ではなく「行かう」「遣らう」に相當するものである。愛知全縣に行はれてゐる(打消ノ「マイ」は「行カマイ」又は「行ケセメー」である)。

之と關聯して考ふべきは、遠江にある誘引を示す「マイ」である。遠江東部では「行キマイカ」と云ひ、遠江西部では「行カマイカ」と云ひ、時に「行カマイ」とも云ふ。尾張でも「行コマイ」の外に「行カマイ」と云ふ地方もあるから愛知の「行コマイ」が「行きませう」の意になるのはかう云ふ經過をとつたのかも知れない。

名古屋は特色のある形式を持つてゐる。例へばもう少くなつたが士族の言葉に「オッカソン」(母)「オトッソン」(父)のやうな「ソン」と云ふ接尾語がある。今日行はれてゐるもので親愛を表はす「オッカハマ」(母)「カネハマ」(兼さん)なども郷土の色が濃い。有名な「ナモ」は舊尾州領の尾張と岐阜の一部とにある間投助詞である。「アノ子ワ利ロダナモ」(ナモシとも云ふ)。三河では「利ロダノン」「利ロダノンシ」と云ふ。この「ナモ」を女は「エモ」と云ふ「ホンナラエモ屹度ゼエモ」。名古屋で之と並んで有名な「オキャーセ」は元來「オキヤーセ」で「ヤーセ」は敬語の「ヤース」の命令形で「おおきなさい」に相當する。「下リヤース」「下リヤータ」も「お下りなさい」「お下りなすつた」である。敬語では三河の「オ休ミマショウ」(お休みなさい)の形や「オ行キル」「オ行キタ」などの形も面白い。「なさい」の變形や「下さい」の變形は種々あるが略すこととする。可能の形には「見ーエル」「見レル」、「セーエル」「セラル」(爲)などが靜岡愛知にある。助詞では主格を表すものに「雨ン降ル」の如き「ン」が東海地方にある。理由の接續助詞は靜岡東部の「降

ルダンテ」「降ルンテ」から、長野・岐阜・愛知の「降ルデ」と遷つて行く。「雨ガ降ルト」を強めて「雨ガ降ルトサイガ」の如き形も海道に行はれてゐる。

動詞の活用では山梨縣は關東風で「飽く」「足る」を上一段に活用させ、「爲る」も上一段の「シル」の活用であるが、愛知岐阜兩縣では「飽く」「足る」は四段に活用させ、「爲る」は下一段の「セル」の活用と變つて居る。

なほ、各縣各地については注意すべき形式には、山梨で發見される假定形「飽キロバ」「飽キロレバ」「高ケロバ」や、長野の一部にある禁止形「ナナ爲ッチョ」の形などがあり、山梨で「出ル」「出來ル」の用法に相違のある事なども有名だが一部の現象であるから省略する。

〔二〕北陸區方言

北陸道の中で越後は東國系統と思はれるので之を省く。若狹は寧ろ近畿方言に屬すべきものであらう。

研究・文獻　富山縣は大田榮太郎氏が精密な言語地理的の調査をされた筈であるが、その結果は僅かに一部だけ發表されたに過ぎない、外に昭和六年に中新川郡滑川町の金森久二氏が越中方言研究會を起し越中方言研究彙報を第六輯まで發行した。同誌中には參考となる報告がある。單行本では、縣教育會の富山縣方言と大田氏の富山市近在方言集があるだけである。石川縣には早く石川縣方言彙集が明治卅四年に發行されてゐた、それを昭和六年に再版したが增補が加はつて居ないのでも分る位、新しい研究はない。この縣では能登方面は注意すべきところと思はれるのに郡誌の外に材料が無い。福井縣には明治卅五年に若越方言集が出てゐる。昭和六年に福井師範學校から福井縣方言集が出た。之は各郡出身の生徒について調べたもので分布を註記してある。外に若狹では大飯郡教育會から大飯郡方言の

研究が昭和八年に出版され、之を石川縣に比べると活動して居るが、二縣とも音韻や語法に關する調査がなく、また分布調査も不完全である。

上記の如く文獻が少い爲に市部以外の地方の言語狀態が不明な處が多い。

音韻と語法の特徴　音韻にて擧ぐべきことは、東北地方に似た若干の現象のあることである。卽ち「イ」は語頭にて「エ」と轉音する。之は越中の諸郡と能登の北部に多い。また「シ」「チ」等を「ス」「ツ」等に轉音するのも富山縣では新川・礪波・氷見の各郡に石川縣では能登の各郡に多い。これ等の現象は一帶の地に連續して居るよりは點々と散在して居るやうであり、今後福井縣の海岸地方に就てかゝる地方の有無を精査したい。地方の局部的現象としては富山の新川郡に輕い摩擦音のv音が存在する。次に記す「ヲ」音はwoに近いvoだと云ふ。「アヲ」(青)「エヲ」(魚)「サヲ」(竿)。また、語中の「バ」行音は「ワヰウヱヲ」(va vi vu ve vo)に發音される。「タワコ」(煙草)「タヰ」(足袋)「コウ」(昆布)「ナヱ」(鍋)「ツヲ」(壺)。なほ飛驒に近い地方には舌背音の「ラ」行音が行はれて特別な音感を人に與へる。

上記の如く富山石川の兩縣には注意すべき音韻現象が少くない。この方面でも能登が注意すべき地方であらう。

去つて語法現象を見ると、北陸區の語法は殆ど西部方言の諸特色を具へてゐるのみならず、近畿方言の影響の著しい事が分る。

東部方言の「ダ」「ダロウ」に對し、西部方言では「ジャ」「ジャロウ」を用ひ、近畿方言ではこれを「ヤ」「ヤロウ」と云ふ。然るに北陸方言には名古屋方言に見る如き「デァ」の形式も「ジャ」の形式も發見する事が出來るが、最も廣く行はれるものはこの「ヤ」「ヤロウ」である。

また理由を現はす助辭として近畿地方の特色をなすものは「サカイ」であるが、この形式も北陸區の上に發見する事が出來る（尤もこの「サカイ」は種々に轉訛して日本海沿岸を東北地方にまで分布してゐる）。即ち、福井縣では「サカイ」「サケ」と云ひ、石川縣では「サカイ」「サカイニ」「サケーネ」等と云ひ、富山縣では「サカエ」「サカラエ」と云ふ。富山縣ではこの外に「ケニ」「ケネ」「ケデ」をも使ひ、又「ノッテ」を使ふ事もある。例へば「ソンジャケネ」「ソンダノッテ」（其だから）等と云ふ。福井縣では「デ」を使用する事もある。「サムイデ」（寒いから）。之は中部地方の「デ」と同系であらう。

動詞の「買ふ」「借る」は共に四段で「テ」に續く時は「買ふ」はウ音便で「コーテ」、「借る」は促音便で「カッテ」となる。

上記の如く近畿の語法形式は殆ど北陸區の方言の上に見られるのであるが、北陸區特有のものも無いではない。二三、珍しいものをあげる。敬語に金澤に「なさる」「なはる」に似た形で「マサル」「マハル」と云ふ形があつて「行キマサル」「行クマハル」と使はれる。富山には「云ウマッシャル」「見マッシャル」と云ふ。命令は「云ウマッシャイ」「見マッシャイ」である。ところが金澤には「見マッシ」「行クマッシ」、多くは「マ」を加へて「見マッシマ」「行クマッシマ」と云ふ形がある。この「マッシマ」も「なさい」に相當するものである。この「マ」は福井にもあつて「見ナサイマ」「見ネーマ」などと云ふ。

金澤では「ます」を「ミス」と云ふ。「行キミス」「行キミシタ」「行キミセン」などと云ふ。之は有名な方言である。「下さい」に相當するものに「タイ」があつて「待ツテタイ」「待ツテタイマ」と金澤で云ひ、「買(コ)ーテンダイ」「取ッテンデー」と福井で云ふ。

「ございます」の系統では山梨縣の特色とされる「ゴイス」が福井にも行はれてゐる。

疑問を表はす助詞の「か」は多く「ケ」と云ふ。例へば「さうか」を「ソーケ」と云ふ、或は「かえ」の略形かも知れない。然るに金澤で之を「キ」と云ふ。「ゴザリミスキ」は「ございますか」で、「オーダスバスキ」は「おいで遊ばすか」である。

一種の「の」に當る助詞を「ガ」と云ふ「赤いのや白いのや」を「赤いガヤ白いガヤ」。「のに」を「ガニ」と云ふ。「そんな人でもなかつたガニ」。「のや」を「ガヤ」と云ふ。「さうはしとれんガヤ」。「來たのだ」を「來タガジャ」、「行くのだらう」を「行クガヤロー」、かゝる類は廣く行はれてゐる。

係助詞の「こそ」について富山に一種の用法がある、富山縣方言には「女でコソあれか實に立派なもんだ」「こどもでコソあれかよく出來る」と云ふ二例を擧げ、越中方言研究彙報には「あんたコサ善かれ(か)おらどうすっがえね」、「あんたからコサ聞かんねか、善う知つとる」の例が擧げてある。文語の係結法と關係のある面白い云ひ方である。

平安朝文法史四六八頁以下に「いといたくこそゐなかびにけれな。」「にくしとこそ思ひたれな。」等の例をあげた後に、

これにつきて思ひ出すは著者の郷里越中富山の方言に「こそ」に對する曲調終止の下に必「か」を加へてたとへば、

これこそよけれか。

あなたにこそいうたれか。

の如くす、それとこの語法と頗相似たり、……思ふに上世かゝる語法存せしものなるべし、更に思へば「かくこそ思ひしか」の「か」は卽この用法の「か」にして慣用の久しき遂に活用の如くになりしものなるべし……

とあるのは卽ちこの云ひ方である。

句の終りにつけて意を強める助詞に富山金澤に「ガイ」「ガイネ」がある。「デカイコト雪が降ッタガイネ」「一錢デモナン呉レンガイ」。

また、石川・福井に「トコト」「トコ」と云ふ助辭がある。「さうじやトコト」「早う來ないトコト」。何れも強めの助辭で「さうですよ」「早くおいでなさいと云ふに」のやうな強さを持つ。

福井には「クライ」と云ふ助詞に次のやうな用法がある。「出來ますグライ」「電燈はランプより明るいグライ」。之も強めの助詞で、「出來ますとも」「明るいとも」と云ふ位な云ひ方である。

北陸區にも東山東海區と同じやうな誘引を現はす「マイ」もある、「行クマイカ」「食フマイカ」。この云ひ方は更に近畿方言にも關係をもつものである。

第三章　近畿方言

近畿方言とは京都府大阪府を中心とし、之に隣接する滋賀・三重・奈良・和歌山・兵庫の各縣と若狹國に行はれる方言である。區域内の小方言の區劃は未だ明かでない。京阪は江戸時代にもその方言によつて記された文學に乏しくないので精査したら方言の史的變遷を辿ることも可能と思はれる。それと反對に近松西鶴等の文學に現はれた用語が近畿方言の中に發見されようと云ふ期待から、近來この方言を研究する學徒も少くない。これ等の方言文學に就ては記述を略し、純粹の方言研究の狀態についてのみ記したい。最初に述ぶべき事は昭和六年に京都帝國大學内に新村・吉澤兩博士を中心として近畿國語方言學會が組織された爲に、近畿その他各地の方言の採集調査が着々と行はれて來

た事である。既に會員の泉井久之助氏のダスとドスの分布調査や、會員有志の十津川方言の採集の如き有益な研究調査が公表されてゐる。近畿地方の組織的調査が本會によつて指導される事は大きな幸福である。一府縣の單獨調査に比べて近畿地方を一單位とする調査が方言學の上に如何に大きな貢獻をなすかは云ふまでもあるまい。但し、近畿地方には十津川のみならず今後の調査を待つべきところが少くなく、存外、地方の言語狀態は不明である。例によつて初めに研究と文獻とを述べ、次に方言の特色を概說したい。

研究・文獻　近畿地方の東端にある滋賀縣には、全く方言研究書の見るべきものがない。明治三十年に東京帝國大學文科大學の依賴で、各郡で編纂した方言調査書が幸に現存して居たのを、大田榮太郎氏が整理したものが言語誌叢刊の一冊として滋賀縣方言集として發行された。それが殆ど唯一のものと云つてよい。

三重縣は森正俊氏によつて音韻方面は研究されてゐるが、伊賀で阿山郡方言訛語集、伊勢で地方方言集があるばかりで、最も興味ある志摩に關する調査の無いのは如何にも殘念な事である。

之に比べると隣縣の和歌山縣は多くの方言書を持つて居り、明治二十年に既に多屋氏の田邊方言が出て居る(尤も明治時代には他に見るべきものは無かつた)。その後では大正十三年の森彥太郎氏の南紀土俗資料中の方言訛語篇は注意すべきものである。昭和以後には多くの方言書が出て、八年には之を集成した和歌山女子師範の吉川靜雄氏の和歌山縣方言が現はれた。本縣では近く出た上山景一氏の紀州方言はまだ音韻篇だけだが出色のものである。

南部の牟婁郡方面は三重縣に屬する諸郡をも加へて精査したい地方だと思ふ。

奈良縣は方言書のない地方である、師範に方言カードや研究書の稿本がある位で、外には小瀧久雄氏や新藤正雄氏

の研究が發表されてゐる。全縣特に山間部を籠めた調査が欲しい。幸に吉野地方が近畿國語方言學會の人々や岸田久雄氏服部四郎氏等によつて調査され始めたのは喜ぶべき事である。

京都府は頗る廣い地域を占めて居る。先づ市部から云へば、その訛言については慶安三年に安原貞室の著した「かた言」があつて之は古典全集に「丹波通辭」や「浪花方言」などと共に收められて居る。明治卅六年に市教育會の方言調査報告書がある。やはり三十年頃に稿本に吉澤博士の方言調査報告書があつて、之には八瀬大原方言に關する記載もあつたが例の震災にかゝつて東大の研究室で燒けた。アクセントに關しては露人ポリワノフ氏の研究が露文で發表されて居る。例の近畿國語方言學會の有志の中で、公家華族の言葉も調査したいと云ふ話もあつた。是非、京都方言の科學的檢討を計畫していたゞきたい。

丹波方面について幕末の頃の丹波通辭が殘つて居るのは珍しい、明治以後では府立第三中學の調査書がある。丹後方面では宮津近くの加悅(カヤ)谷方言調査書がある。今後は丹後方面を語法方面から精査したい。府下全部には明治三十九年の師範學校の京都府下方言一覽がある。以上の方言書も多くは單語集である。

大阪府では市部にかなり方言集がある。舊幕時代に文政二年の浪花方言と天保十五年の新撰大阪詞(版本)がある。明治以後にも「言葉のよしあし」を初め數本あるが、あまり良書はない。郡部についても明治三十三年の泉南郡教育會の「言葉のしらべ」や近くは「鄉土和泉」方言號がある。大阪府としては、大阪市の言葉を各方面から觀察したいものである。所謂船場言葉なども今日之を調査しておきたい。京都大阪の兩京の言語の比較は「皇都午睡」にも出て居るが、之などもよき研究問題と思はれる。

兵庫縣は丹波・但馬・攝津・播磨・淡路の五ケ國を含む大縣である。この中で丹波は京都府中の各郡と併せて研究すべきもので、攝津・播磨とは違つた方言を持つ地域である。

但馬には「但馬方言」が昭和六年に出て居り、淡路にも昭和八年に玉岡松一郎氏の淡路方言資料と昭和九年に田中萬兵衞氏の淡路方言の研究が出て言語地理學的な調査も行はれてゐる。播磨では高田十郎氏の播州小河方言と、近く河本正義氏の編纂した兵庫縣方言集成中に數郡の分を見出すことが出來る。攝津では神戸市方言に關する小冊子が若干ある。兵庫縣に就ては兵庫縣民族研究會の活動を期したいものであるが、研究の興味のあるのは丹波・但馬・淡路であらう。特に但馬は京都府の丹後と併せて研究すべき地帶である。

音韻と語法の特徴　東西の母音を比較すると夫々性質の違ふ點はあるが特に「ウ」母音の異なる事が注意される。東部方言の「ウ」は脣を圓くする事がない。然るに近畿では幾分脣に丸味をつけて發音し稍鈍く籠つて聽える。また、母音によつて鼻音化する傾向のある地方もある。子音では「ジ」の子音が東部方言に比してdの要素が少くziに近い。音の訛りでは二重母音の「アイ」「オイ」等が東部方言と違つて「エー」になる傾向が少い、「サカイニ」が「サケニ」となるのはその少い例である(尤も兵庫縣の但馬地方ではæ音になる)。子音ではザ行・ダ行・ラ行間の相互の轉換が多い。(和歌山縣南日高では「ダ」行音のみを用ひ、「ザ」行音は殆ど發音が出來ないと南紀土俗資料に記してある)。近畿一帶に「ダ」行より「ザ」行、「ザ」行より「ダ」行、「ダ」行より「ラ」行、「ラ」行より「ダ」行、「ザ」行より「ラ」行、「ラ」行より「ザ」行への轉音を發見する事が出來る。連音上では鼻音同化・促音同化がかなり多い。「ユーレン」(幽靈)「ソーレン」(葬禮)などの例もある。短音を長呼する例で最も有名なのは一音節の名詞を長呼する事で、この長呼された音には四

種のアクセントの型がある。京都ではホー(帆)は平調だが、ホー(頬)は終りが上つてから下る。ヒー(日)は下降型でヒー(火)は上昇型である。またシーロイ(白い)クーロイ(黒い)の如く形容詞の第一音節を長呼して人の注意を引く事がある。一方長音を短呼する例がオーの長音に最も多い。例へばオサカ(大阪)。近畿地方のアクセントが東部方言と違ふ事も古くから注意されて居り、特に二音節語では東京と京阪とでは反對のものが多く、その外に京都のアサ(朝)の如きは「サ」が一度上つてから下る。こんな型もある。兎に角、近畿アクセントは東部のアクセントと對峙して著しい對照を見せてゐる。

然るに茲に面白いのは大和の十津川地方のアクセントで、既に吉町義雄氏が之を「方言」第二卷第八號の誌上に書いた事があり、服部四郎氏も親しく踏査の上之を調査された。その結果十津川地方のアクセントは東京のアクセントと略似たもので近畿アクセント地方内に於ける言語の島をしてゐる事が明かになつた。

近畿地方の音韻については「シ」がタ行の前で「ヒ」となる傾向等述べたい事も少くないが省略して語法にうつる。指定の「ダ」を「ヤ」と云ひ、從つて「ダロー」を「ヤロー」「ヤロ」と云ふ如き東西の語法の中で常に引用される對峙についでは重複を避けて茲に述べないが、その一部は第一章第二章中にも見る事が出來よう。茲にはそれよりは稍細かな特徴を拾つて見る。

近畿方言で東京方言などと違ふ點は進行現在を「ヨル」、存在形を「トル」で區別する事もその一つである。東京なら「餅が焼けてる」と一つに云ふのを「焼ケヨル」「焼ケトル」と分けて云ふ。打消形は「行カン」「行カナンダ」「行カント」「行カニャ」「行カンナラン」が、東京の「行かない」「行かなかつた」「行かないで」「行かなけりや」「行かなきゃな

らない」に當る。不可能は「ヨー讀マン」と云ふ。使役の助動詞は「行カセル」もあるが「行カス」と多く云ふ。「私カテ」は「私だつて」で、「酒ヤタラ」は「酒だとか」である。この位の相違となれば際限はないので省略して、各地方の特徴に移らう。

先づ京都市・大阪市の方言を對照すると音のテンポが京都は悠長で大阪は急促だと云ふ感がある。語法では「ドス」と「ダス」、「オス」と「オマス」との對立が先づ注意を引く。前にも述べた通りに京大の泉井氏はこの淀川沿岸に於ける分布を調査してその結果を講演されその大要は方言の第二巻第一號に載せてある。氏に從へば「ドス」は山城に、「ダス」は攝津に分布してその境界は國界と略一致してゐるが、「ドス」が幾分攝津に進出して居り、背後の廣がりは「ドス」は山城近江の外は丹波の一部まで、「ダス」はほゞ攝津・大和・播磨・丹波に及んでゐると云ふ（「ダス」は北陸や東北にも分布してゐるやうであるが、成立が違ふかも知れない）。思ふに「オス」「オマス」の分布に於ても略似た結果を得るのではあるまいか。「ドス」「ダス」は東京の「です」に相當し、その形を見ると「ドス」は「ソウドス」「ソウドスカ」「ソウドシタ」「ソウドッシャロ」「ソウドッセ」などと使ひ、「ダス」は「ダス」「ダッカ」「ダシタ」「ダッシャロ」「ダッセ」などと使ふ。

「オス」「オマス」は東京の「ございます」にあたるもので、「オス」「オスカ」「オシタ」「オスヤロ」（又はオッシャロ）「オッセ」とか「オマス」「オマッカ」「オマシタ」「オマスヤロ」（又はオマッシャロ）「オマッセ」とか云ひ、その打消は「大事オヘン」とか「大事オマヘン」とか云ふ。丁寧に云ふ時に「マス」を使ふ事はあるが音變化を起す點が東京と違ふ。例へば「行キマヒョ」（「行キマホ」）「行キマヘン」「行キマンノニ」とか「違イマッカ」「違イマッセ」「違イマッシャロ」

とか云ふ。敬語に「ヤス」「ヤース」を使ひ「オイデヤス」「オイデヤース」と云ふ事は兩市共に云ふのであるが特に京都では「ヤス」を多く使ふ。「見トオミヤス」「オ越シヤシタ」と云ふのは「御覽なさい」「お出でなすつた」に相當し、「書イトクレヤス」「來トクレヤシタ」は「書いて下さい」「來て下すつた」に當る。その外に「ヤハル」「ハル」を使ふ、「來ヤハル」「來ヤハッタ」「來ヤハリマス」、「泣カハル」「泣カハッタ」「泣カハリマス」と云ひ、大阪で多く「下さい」に「來トクナハレ」と「クナハレ」を使ふ。

打消形では「分らない」を「分ラン」と云ふよりは「分ラヘン」と多く云ふ。從つて「無い」を「有ラヘン」（「有レヘン」）「有ラシマヘン」と云ふ、「せん」「ません」に當るものか。「爲ません」は「セーヘン」で「來ません」は「ケーヘン」と大阪で云ふ。大阪の若い女子の言葉で「讀ムシ」「大キイシ」「厭ヤシー」のやうな「シ」と云ふ助辭をつける事や「待ッテーナ」「待ットー」「待ットン」（待つて下さい）と云ふやうな形を使ふ事は耳立つ特色である。大阪には促音便も多いが「云ーテマンネ」（ますね）「ソウダンガナ」（さうだすがな）「スンネン」（爲る）「行クノンデ」（ので）など、鼻音も多く使ふ。「タイテンカ」（煮てくれないか）などもその例であらう。

近江は琵琶湖を中心としてゐるので湖北湖南で言語の違ふ事は云ふまでもなく湖北は若狹に近く、湖南は京都の影響が多い。若狹も一音の語が長呼されたり、ムカゼ（百足）レンシン（電信）ドス（留守）などｄｚｒ間の轉換がある。「大飯郡方言の研究」によると、「ガ」行音が凡て鼻音になつて居り、「セ」が多くの場合「シェ」と發音されるとあるのは注意してよい。形容詞の音便に「ウツクシナイ」（美しうない）、「アツナッタ」（暑うなつた）、動詞の音便に「カッタ」（借りた）「コータ」（買つた）「モロタ」（貰つた）など云ふ點や、「ハシットル」（走つてゐる）「タベモッテ話シトル」（食べながら）、

「オ前カテ女ヤロー」(お前だつて女だらう)などの形式があるなど全く近畿的である。但し「ドス」は幾分行はれてゐるが「オス」が若狹に入つて居るかどうか不明である。

近江では「ドス」「オス」は全國に行はれてゐる。近江は特に湖南は全く京都式である。大津高女の「女子言葉遣」は之をよく示してゐる。「下さい」の方言形として「オクレナ」「オクンナ」「オクレーナ」「オクナハイ」「オクンナハイ」「オクンナイ」「オクレーサ」「オクレヤス」「クダイ」「クダシカレ」「クレンカ」「クレヘンカ」「クリャヘンカ」とあり、「それだから」の條に「ソーヤサカイ」「ソヤサカイ」「ソーヤサケ」「ソーヤハケ」「ソーヤヨッテ」とあり、「さうです」の條に「ソードス」「ソードスエ」「ソース」とあり、「あります」「ございます」の條に「オス」が見える。この中の「クダシカレ」は彦根言葉として有名なものである。また「オス」の打消は「オヘン」よりは「オセン」が廣く使はれてゐる(「オマス」が高島郡にある。大津にもあるやうに前揭の女子言葉遣に見えてゐるが再調を要する)。語法から云へば近江はまづ京都風の言葉遣と見てよい。轉じて奈良縣を見たい。

奈良縣では「クヮ」「グヮ」と發音し「クヮシン」(菓子)「トングヮ」(唐鍬)など明瞭に云ふ。小瀧氏によれば「ア」行の「イ」「エ」「オ」と「ハ」行の「ヒ」「ヘ」「ホ」との間に中間的な音があり、「コヒ」(鯉)「アサガホ」(朝顏)等は必ずしも「ア」行音でないさうである。之は注意すべき事實であらう。その他の特質は京阪と同樣と見てよい。

語法に於ても京阪と多くの相違はない、打消にも「行カヘン」「來ヤヘン」など「ヘン」を利用するが、この「ヘン」が「ヒン」と訛る事が多い。接續上では「來ない」は京都では「キーヘン」、大阪では「ケーヘン」であるが大和中部では「キヤヘン」「キヤン」であり、敬語助動詞は「ヤハル」「ハル」「ヤル」であるが奈良では女子は「イカハル」を「イケヘル」と

云ひ「イカハッタ」を「イケヘッタ」と云ひ「行カハレ」を「行キヘレ」と云ふ程度の相違はある。同様にまた「行キョル」「書キョル」を「行ッコル」「書ッコル」と云ふやうな事があり、「ヨッテニ」を「ヤッテニ」などと訛る。「です」「ございます」の方言形は「ダス」「オマス」で大阪系である。

奈良縣でも南部の吉野山地地方特に十津川北山川の上流地方は別天地である。その地方の特別なアクセントに就ては既に記した通りであるが、音韻語法に於ても特色がある。音韻では中國地方のやうに音便の「アイ」を「アー」と云ふ、セマー(狭い)、カータ(書いた)、サーナ(そないな)、また「飲んだ」を「ノーダ」と長音にする。語法では和歌山のやうに語尾に「ラ」「ライ」を附ける。書ケルモンナラ(書けるもんかよ)、話サーラ、話ソーライ(話さうよ)、町ヲ見ニ行コラカ(行かうか)。疑問の動詞は「コ」である。行クンコ(行くのか)、之は平坦部では「ケ」である。和歌山を説く前に三重縣を一瞥しよう。

三重縣の言語が音韻・語法共に近畿方言の特徴を持つてゐる事は云ふまでもない。單音節語の長呼を見ても、zdrの轉換を見ても、動詞の音便形、指定の「ジャ」「ヤ」、理由の接續助詞「サカイ」の使用皆然りである(但し桑名は稍關東的なところがある)。たゞ北部に名古屋の影響をうけて「オキャーセ」や「トサィガ」を使ひ、南西部の牟婁地方が紀州辯で「行コライ」「來ッライ」など云ふのは自然の事であらう。語尾の「ネヤ」「ノー」は廣く行はれてゐるが、奈良・和歌山にも之は發見される。「ドス」はなく「デス」、稀に「ダス」を松阪方面等で使ふ。「オマス」「オス」は使はない。(鈴鹿郡で「暑ツアス」「寒ムアス」と云ふ形がある。)「サカイニ」には「サカイデニ」の變形がある。

打消には「ヘン」「セン」を使ふが接續は様々で「爲ない」には「シヤヘン」「シヤセン」「セーヘン」、時に「シーセン」

「サーセン」の形があり、その過去形は「シヤセンダ」又は「センダ」である。打消の過去では「聞カン」の過去は「聞カンダ」で「ナンダ」は普通でない。敬語には「ナハル」「ハル」が行はれてゐるが、命令には「飲マンセ」「見ヤンセ」などの方が多く使はれる。

注意すべき形として伊賀阿山郡に打消に「勉强センズクニ」(勉强せずに)と云ふ「ズクニ」の形があり、志摩に女の言葉に「見ヨラマー」(お覽なさい)と云ふ紀州風な云ひ方があり、同國船越村に「火鉢ヨチ持テ來イ」の「ヨチ」の助詞のあるのが珍らしい。

紀州に入ると、「オス」「オマス」はやはり無く「ゴアンス」が熊野にある。田邊では「ゴヤンス」と云ふ。「ドス」「ダス」も行はれないで「デス」であるが、「田邊方言」には「デンス」の形が見えてゐる「見ルンデンス」。「サカイ」「サカイニ」には「サカ」「サケ」「サケネ」「ハカイ」「ハカイニ」「ハケ」などの訛がある。打消は「有レヘン」「來ーヘン」「爲ーヘン」などとも云ふと共に「見ヤン」「走レヤン」のやうな「ヤン」を使ふ。また「好カナ」「走レナ」「エー讀メナ」の如く「ナ」を使ふ。これは「好かない」「走れない」である。「ナ」でも「來ナ」「見ナ」は「來なさい」「見なさい」であり、「來イナ」「見イナ」は「來るな」「見るな」である。

紀州言葉の特徴とも云ふべき助詞は「ラ」である。「行コラ」「行コライ」は「行コ」(行かう)についたもの、「アレハタレナラ」は「タレナ」(誰か)についたもの、「マイリャンショラ」は「マイリャンショ」(參りませう)についたもの、「トッタグラ」は「トッタグ」(取つて上げる)についたものである。

外に終りにつく助詞で特色のあるものに勸誘の「ヨシ」がある。「見テミヨシ」「飲ミヨシ」は「見なさい」「飮みなさ

い」の意である。意を強めるものに「シテ」がある。「起キラシテ」「有ラシテ」は「起きますよ」「有りますよ」である。女はよく「ノシ」を語尾に使ふ。「雨ガ降ルノシ」。

「何々して下さい」に相當する言葉は頗る多い。「クダンセ」「クダンシ」「クランセ」「クランシ」から「クダ」「クラ」の略形もある。「ソノ本取ッテクダ」。「呉れ」の系統で「ケンカ」が有る。「ソノ本取ッテケンカ」。

紀州全國ではないが日高郡を中心とし隣接の有田・西牟婁兩郡の一部及び伊都郡の花園村に於て文語二段活の動詞が、終止形が連體形に攝せられただけで左の如く文語の形式を留めてゐる。

起(オ) キ、キ・クル、クル、クレ・キイ

受 ケ、ケ、クル、クル、クレ、ケイ

この事實は早く注意され既に紀伊名所圖會に「凡べて活用の語雅言には五十音の第三音列(ウ)にていふ語を俗語にては第二音列(イ)第四音列(エ)にていふ事諸國大かた同じ、其一二を言はゞ見ゆるを見えるといひ、起くるを起きるといふ類なり然るに蕪坂以南熊野の地の半に至るまでの言語は猶ほ雅言のままに第三音に正しくいへる事萬言皆同じければ俳諧狂歌等の雜體の作といへども土人此活用を誤る事なし」と記してある。これは上下二段動詞のみでなく同活用の助動詞「る」「らる」「す」「さす」も同様である。

次に面白いのは「アル」と「オル」との使ひ方で、生物無生物の區別なく一般に「アル」を用ひ、やゝ丁寧に「ございます」と云ふやうな時は「オル」を用ひる。例へば「太郎は濱に居たか」と云ふ時に「濱ニアッタカ」と云ひ、「居ない」と云ふのを「濱ニナイ」と云ふ。「いくらですか」の答に「一圓デオリマス」、朝の挨拶に「オ早ヨオリマス」と云ふ。

兵庫縣は廣い縣だけに一樣には云へない。攝津は勿論大阪方言の系統であるが播磨や淡路もさう見る事が出來る。「ダス」も「オマス」も行はれてゐる。勿論、西に進むに從つて中國の影響があつて「サカイ」に交つて「ケン」は印南郡にあるし、「サケン」と云ふ中間形が加東郡にある。一方「敎エテクンナハレ」とか「敎エテンカ」とか云ふ形が宍粟・揖保郡あたりから「敎ヘテツカー」と變つて來る。淡路三原郡にも「ツカ」を使ふ。「ゴワス」は「オマス」と共に赤穗郡にも淡路にもある。

淡路で注意すべきは「ジャロー」「ヤロー」が用ひられず、「ダロ」が使はれる事である。しかも、單なる指定は「ジャ」である。「エエ天氣ジャ」「明日モ天氣ダロカ」。「見たらう」と云ふ過去推量は「見タダロー」と云ふ。また助詞では「クライ」に面白い用法がある。「君の家にもあるか」の問に對して「有ルクライヨ」と云ふ、「有るとも」と云ふ語氣である、福井の用法と似てゐる。

兵庫縣で全く他郡と異なつた色彩をもつものは但馬の諸郡である。朝來郡の一部を除くと鳥取縣の方言と一類となるものかと思はれる。音韻上の特色は「アイ」の二重母音を æ 音に轉音する事である。例へば大工は「ダァーク」である。また「カ」行鼻濁音も漸くその痕を留めるだけで、アクセントの型も中國方言に類似してゐる。語法で云ふと「ヤ」「ヤロ」は殆んど行はれず、「ジャ」「ジャロー」は朝來・出石・養父三郡だけで、城崎・美方の二郡は「ダ」「ダラー」である。「ダス」は朝來郡にあるがその他には行はれず「デス」である。「オマス」も勿論無い（城崎郡餘部(アマルベ)に「オス」があるとの報告がある。再調を要す）。理由を現はす接續助辭「サカイ」は朝來郡にはあるが、養父・出石・城崎郡で「シキャー」「シケー」となり美方郡では「ケー」となつて中國方言と一致する。朝來郡と美方郡との中間にある養父郡は南部は朝來

系で近畿の影響があり、北部は美方系で中國的だと云はれる。「借りて」は近畿では「カッテ」と促音便にするが朝來郡を除くと但馬は「カレテ」時に「カリテ」と云ふ。又「買ひて」は近畿では「コーテ」とウ音便にするが之も朝來郡を除くと但馬は「カーテ」であり、同様に「聞かう」は「キカー」と云ふ。特に鳥取方言の特色なる「山カラ辨當食ベタ」のやうな「にて」の意味の「カラ」が城崎・養父・美方の三郡に現はれて居る。

上記の諸現象を考へると但馬は朝來郡を除けば中國方言の區域に入れる方が妥當かも知れない。

第四章　中國方言

中國方言とは山陽山陰兩道の內、岡山・廣島・山口・鳥取・島根の五縣の方言を總稱するものである。この方言を更に二區に分ける、一は出雲・隱岐と伯耆との三國の方言で之を雲伯方言と名づけ、その他の地方に行はれる方言を假に中國本部方言と名づけたい。最も因幡の方言は山陽道諸國の方言と相違する點もあるが、便宜上、岡山・廣島・山口諸縣と石見・因幡兩國の方言を一括して考へる事とする。

〔一〕中國本部區方言

研究・文獻　岡山縣は明治卅年代に方言調査の行はれた事があり單行本も二三出て居るが、岡山方言研究の先覺者は、昭和五年に物故した島村知章氏であらう。氏は桂又三郎氏と共に岡山文獻研究會を組織しその機關雜誌上に岡山方言の語彙を揭げ、續いて音韻を調査し更に語法に着手したがこれを完成せずして早逝した。親友を失つた桂氏はその後更に中國民俗學會を設立して同志と共に岡山縣下の方言を踏査し、多くの方言集を出して居る。就中、岡山動植

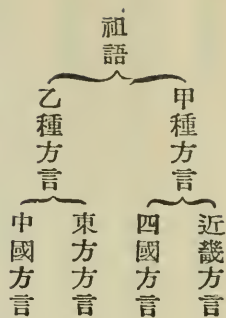
物方言圖譜は好著である。第六高等學校の佐藤清明氏は岡山一縣の方言研究家と云ふよりは全國方言の比較研究の方が有名であるが岡山縣下丈の方言調査もある。岡山縣植物方言辭典なども特色ある著述である。岡山も美作方面には美作の六校の高等女學校の合同研究があるだけで心細い。岡山では兒島灣附近も言語の島として注目されてゐる。

廣島縣には廣島文理科大學內に廣島方言學會があり土井助教授の指導の下に廣島を中心とし中國四國に亘つて方言の研究を試みて居る。現に同會員中から藤原與一氏や山田正紀氏を出して居る。藤原與一氏は初め廣島縣と愛媛縣との方言境界線を內海上に求め之に成功した、この業績は廣島方言學會年刊第一輯として昭和七年に發表された。爾後引續き內海諸島のアクセントを調査して居る。山田正紀氏は瀨戶內海各島嶼に於ける方言分布を主として調査した。その大要は「方言」第二卷第六號に發表した通である。なほ廣島方言研究者として忘るべからざる人に廣島師範出身の村岡淺夫氏がある。氏は縣內の言語分布を計畫し、その調査の結果は昭和八年に同師範の鄕土研究室から廣島縣方言の研究として刊行された。その他に府中方言集を出した清水範一氏や、廣島縣の目高魚(メダカ)の方言分布を發表された磯貝勇氏は、中國地方語彙を出した川崎甫氏と共に功勞ある人々である。

山口縣では柳井町方言集を出した森田道雄氏があり、防長方言調査表を出した防長史談會の人々もあるが、山口高女の白上貞利氏が高女の生徒と協力して調査した「山口縣方言調査」は語法形式の分布調査で珍しい研究である。外にまだ發表されないが、室積女子師範の大本信雄氏の調査も縣內の言語の分布調査で、旣に多くの分布圖が出來て居る筈である。

石見國の研究や文獻については次の雲伯區を述べる際に併せて說く事とする。

音韻と語法の特徴　中國方言が近畿方言と著しく相違する點はアクセントにある。服部四郎氏によれば山陽道地方(播磨を除く)の方言のアクセントは近畿アクセントとは著しく異なり反つて東方アクセントに酷似してゐる。氏はこの點を根據として、

```
祖語 ┬ 甲種方言 ┬ 近畿方言
     │          └ 四國方言
     └ 乙種方言 ┬ 東方方言
                └ 中國方言
```

の如き方言の親族關係に關する一假說を學界に提出された。この研究はその後、東京文理科大學方言研究會の大原孝道氏によつて補足され、中國アクセントの行はれる範圍は岡山・廣島・山口・鳥取の各縣と但馬國で外に出雲の一部(能義・飯石の二郡)と丹後の一部(熊野・竹野・中の三郡)である事が「方言」第一卷第三號に發表された(なほ、出雲の大部は多少中國アクセントと異つたアクセントを持つてゐる)。

尤も一口に中國アクセントと云つても多少の相違はあり最も關東地方に似てゐるのは廣島・山口の兩縣と石見とである。例を廣島縣にとると一音節のアクセントは全く東京と同じく、二音節のものも時に例外はあるが殆ど同じである。三音節となると例外が漸く多くなるが、概括して東方アクセントに酷似してゐる事は否定されない。

音韻方面で近畿方言と異なる第二の點は「カ」行鼻濁音の存在せぬ事である。之は國語調査委員會音韻分布圖第廿五圖を參照すれば明かである。但馬は美方郡にこの鼻濁音の無い事は明かであるが、恐らく但馬一國に無いのではある

まいかと思ふ。

音韻につき第三に注意すべき點は「アイ」の二重母音の轉訛である。但馬でæ:音となる事は既に記した通りであるが岡山縣のæ音も有名なものである。島村氏に從ふと、

「ア」に前舌母音が後續する場合には極度に前舌化され、aを通り越してæに落ちつく、同時に後接の前舌母音を同化してæの長音になつて了ふ。……之が名古屋の「オキャアセ」辯とどんな異同があるか……比較を試みるとア音が前舌母音に後續するときaがæ音に轉化することはよく似てゐるが「オキャアセ」の「キャア」と、「オケャヤマ」の「ケャ」とは全く違ふ、後者がōkæ:ma（或はōkĕæma）の如く前舌母音であるのに對し、前者ではōkĕäse の如く前舌から後舌に推移してゆくやうに考へられる。

とある。その音質はとにかく、このæ音は岡山全縣の外に廣島の備後に分布してゐる。然るに安藝に入るとæ音はなく「アイ」は多く原音を保存するか稀に「エー」となる。山口縣では、周防の佐波・吉敷と長門の阿武・大津・豊浦等で、一種のæ音に發音される。

但し音便から生じた「アイ」音は廣島・山口兩縣及び石見國では「アー」の長音となる例で、アカー（赤し）、ナルマー（なるまじ）、カーテ（書きて）などと云ふ。

子音轉換では特に注意すべきものはなく、「ザ」行「ダ」行の互換が稍多いと云ふ程度である。なほ近畿地方にある一音節語を長呼する傾向も中國方言には認め難い。

語法について見ると、兵庫縣を去つて岡山縣へ入つても著しい相違はないが、指定の「ヤ」は「ジャ」におき更へられ從つて「ヤロー」は「ジャロー」となり、理由を現はす接續助詞「サカイ」は英田郡に其痕を見せるだけで「ケー」「ケン」

が之に代つて現はれる。敬語助動詞の「ナハル」「ハル」も共使用が少くなつて「オ行キンサル」「行キンサル」が多くなり共命令形は「オ行キンサイ」「行キンシャイ」である。同様に「御見なさい」は「オ見ンサイ」「見ンサイ」「見ンセー」であるが、時に「見ラレ」「見ヤイ」の形が用ひられる。之を丁寧に云へば「見テツカーサイ」「見テクレンサイ」である。この「下さい」の意の「ツカーサイ」「ツカーシャイ」「ツカイ」等は中國方言の一特色である。「見ンサイ」を打消せば、禁止で「見ンサンナ」と云ふ。「爲るな」は「シンサンナ」「スナ」と云ふが、岡山市で「オスナ」と云ふ事もある。「起きるな」は「オキナ」である。

存在は「雪が降ットル」、進行は「雪が降リョール」。打消の過去形は「ナンダ」で近畿とこれ等は變りはない。

格助詞の「を」が、iで終る名詞に續く時には、中國方言では之を「ゼニュー」(錢を)「ヒュー」(火を)のやうに拗音にする(但しeに終る名詞に續く時は「サキョー」(酒を)となり「サキュー」とはならない)。「起きよう」を「オキュー」と云ふのも同様な音變化であらう。

「ございます」に相當する方言形は「ゴザンス」「ゴザイス」「ゴンス」で「ガンス」は少い。

廣島縣では備後はまだ岡山方言に似て居るが、でも「など」(等)の意の「ヤコー」と云ふ言葉の如きは廣島縣に入ると頓に少くなる。推量の「聞いたらう」は廣島以西では「キイツロー」と云ふ事が多い。

「晴レル思フ」「山田云フ人」などの所謂「ト」抜けの現象は廣島の一特色のやうに思はれて居るが之は岡山にもあり、更に云へば近畿にもある。之に比べると「ございます」を「ガンス」と云ふのは、廣島ガンスと云ふやうに廣島縣に入つて著しく耳立つ言葉で「ございませう」は「ガンヒョー」である(「ませう」も「マヒョー」と云ふ)。

打消の過去形は安藝に入ると「ナンダ」の外に「ザッタ」、「ダッタ」が加はる。「行カザッタ」「行カダッタ」と云ふ。「から」の意の「ケー」は「ケン」稀に「キン」を交へ、「けれど」の意の「ケード」もまた「ケンド」を加へる。「降ットル」のほかに「降ッチョル」の形が喜ばれる。以上のやうな諸傾向が現はれて來る。

動詞の音便形「コーテ」(買)、「カッテ」(借)は岡山縣と相違はないが、「出して」は近畿の「ダイテ」が岡山の「ダャーテ」となり廣島では時に「ダーテ」となる。之は音韻で述べた「アイ」が「アー」となる現象で「アカー」(赤い)「スマー」(爲まい)が安藝あたりから多くなるのと同じである。また「飛んだ」「讀んだ」が「トーダ」「ヨーダ」とウ音便になるのも安藝に入つて多く現はれる。

廣島縣は安藝と備後とでかなりに相違があり、安藝は一層中國的である。備後の內では南部の福山領の沼隈・蘆品・深安の三郡は特に音韻の訛の多いところである。「ウイ」の二重母音はこゝでは「イー」になる、キーモノ(食物)シンリー(親類)。また「泣かずに」は「ナカント」と云ふところを福山市を中心として「ナカット」と云ふ。この「泣かずに」と云ふ形を廣島全縣特に北部で「泣カンコーニ」と云ふ。岡山では眞庭・阿哲の兩郡だけで使ひ、山口縣に於ては周防には少く長門で使ふ。廣島では「泣カンズクニ」の形も稀にある。

山口縣に入れば「アイ」を「アー」と轉ずる事や、「飛んだ」「讀んだ」を「トーダ」「ヨーダ」とウ音便にする傾向は愈強くなる。又打消の「ナンダ」に代る「ザッタ」は減じて「ダッタ」となり時に「ラッタ」にまで訛る事がある。

「なさる」に相當する山口縣の敬語の言葉は種々ある。「書きなさい」は「書キンサレ」「書キンサイ」「書キンハレ」「書キナハイ」などの外に、「オ書キーナー」「書キナイ」あり「書キサンセ」「書キサン」「書キハンヘー」「書キハン」あ

り「オ書キーヤー」「オ書キヤーレ」もある。しかし、特に面白いのは「書キマイ」の形である。この「マイ」は「なさい」の意味で「見なさい」ならば「見マイ」「見ーマイ」と云ふ。熊毛・都濃兩郡と阿武郡の一部に分布してゐる。或は「書キマヘイ」と云ふ形もあるのでその略形か。

「下さい」に相當するものは「ツカーサイ」の類に「ツカーサレ」「ツカサレ」「ツカサン」「ツカーレ」「ツカイ」「ツカー」があり「クレンサイ」「クレサイ」「クレサン」の外に、やはり「クレマイ」と云ふ形がある。「クレマイ」も分布は都濃郡と、外に大津・阿武の二郡に散見する。之にも「クレマセー」と云ふ形が見える。

「ございます」に相當するものに「ゴザンス」「ゴダンス」「ゴザーマス」「ゴザイス」「ゴイス」の類がある。ところが周防と美禰・大津の一部に「ゴアリマス」「ゴアンス」「アンス」「ゴワンス」「ゴンス」の分布がある。一體、山口縣には「ございます」と云ふところを「アリマス」と云ふ。「お早うございます」を「オハヨーアリマス」と云ふ事は廣島・山口に行はれてゐる。

山口縣の特殊の語法として者の意味の「の」を「ソ」と云ふ、「白いのは」と云ふのを「シロイソワ」とか「シロイホワ」と云ふ。長門の云ひ方であるが吉敷郡にもある。また言葉の終りに代名詞を附けて「ネータ」「ノータ」「ノンタ」などと云ふ。例へば「哀れな話じゃノータ」「哀れな話でありますネータ」と云ふ、周防に多いが長門にも行はれてゐる。山口縣方言調査によれば「お困りでせう」と云ふ事を「オコマリサエロ」と云ふ地方が大島・玖珂・熊毛・都濃・美禰及宇部市に散見して居るが注意すべき云ひ方であらう。また下關方面では可能に「ヨミキル」(讀める)の形があり九州方言の影響を見せてゐる。

石見に入る、石見は島根縣の中に入つてゐるが出雲とは全く別系統で中國方言に屬する言葉である。特に西の美濃・鹿足郡の方言は山口縣に近い。尤も東の安濃・邇摩郡、特に安濃郡には出雲の影響が多い。

動詞の音便形を見ると「コーテ」(買)「カッテ」(借)は勿論中國方言式であるが、「咲いて」「出して」は安濃・邇摩二郡を除き「サーテ」となり「ダーテ」となる地方が多く、「書きて」は「カーテ」と長音化する。「讀みて」「飛んで」も邑智・那賀特に美濃・鹿足二郡では「ヨーデ」「トーデ」と云ふところが增して來る。

打消の過去形「行カナンダ」の如き「ナンダ」は鹿足にあるだけで「行カザッタ」「行カダッタ」と共に「行カンダッタ」「行カンカッタ」が行はれてゐる。打消の「泣かないで」の形は「泣カンコニ」と安濃・邇摩で云ひ、その他の各郡で「泣カンコーニ」と云ふ。

敬語助動詞は安濃・邇摩には「見ナハル」「見ナハイ」の如き形が多く行はれるが、他の各郡では「見ンサル」「見ンサイ」と云ひ、親近者に「ミナル」「見ナイ」と云ふ。美濃郡益田には「見ンチャル」「見ンチャイ」の訛形もある。

これ等を見ても石見の西部の方言が山口縣と一致してゐる事は分る。

「下さい」は鹿足には「ツカーサイ」「クレンサイ」が多く、美濃には其他に「ヤンサイ」「ヤンナイ」が使はれ、那賀では「ヤンサイ」「ヤンナイ」が主で「ゴセー」が混じ、邑智・邇摩は「ゴセー」「ヤンサイ」、同勢力で安濃では「ゴセ」と「オクレヤ」が用ひられる。「ヤンサイ」は上の「て」の音と融合して「貸しチャンサイ」ともなる。

「ございます」は「ゴザンス」が安濃・邇摩を除いた地方に行はれて居るが、「櫻でございます」と云ふ代りに「櫻デアリマス」と云ひ、更に邑智・那賀を中心とし各郡で「櫻ダリマス」と云ふ。「櫻ダアリマス」の形もある。

特殊な用法では「飲ム〳〵」の如き云ひ方を「飲みつゝ」の意に用ひる事は廣島・山口兩縣共に行はれてゐるが、石見では之を「飲むとすぐに」と云ふ樣な意義に轉用する。

係結の殘存とも見るべきものもあつて「三十デコサレ」と云ふやうな語が老人間に行はれる。これを「クサアレ」とも云ふ。

「ねばならぬ」を「ヨーナ」と云ひ「病氣ヲスレバ學校ヲ休ムヨーナケー、用心セー」と云ふやうに云ふ。この云ひ方は石見一體に行はれてゐる。

石見方言が中國方言に屬すべき徵證はまだ之を求める事が出來るが、こゝに不思議なのは指定の助動詞である。中國方言では指定は「ジャ」を用ひる例であるのに石見方言では美濃・鹿足・那賀三郡の外は「ジャ」を用ひず「ダ」は美濃・鹿足では稍少いが、東に向ふに從つて優勢となり、とにかく石見一國に行はれてゐる。「ジャロー」「ダロー」の關係に於ても同樣である。尤も「拂ひた」の音便は「ハロータ」の外に「ハラッタ」も用ひ、「起きる」の未來を「オキュー」の外に「オキョー」とも云ひ石見方言に現はれた雲伯方言の影響はかなり濃厚なものであるが、この指定は「ダ」の方が「ジャ」より遙かに優勢なのであつて、之等と同一視する事は出來ない。

之と同じやうな例を鳥取方言に見る事が出來る。鳥取方言では八頭郡で時に「ジャ」を用ひる事はあるが全縣で「ダ」を使ふ。「ジャロー」も同樣で縣下一般に「ダラー」と云ふ、之は但馬も同樣である。「ダロー」と云ふべきを「ダラー」と云ふやうに鳥取方言に於ては「聞イタロー」と云ふところを「聞イタラー」と云ひ「聞コー」は「聞カー」と云ふ。「買ひて」は「コーテ」と云はず「カーテ」と云ふ。時に促音にして「カッテ」と云ふ。面白いのは「借りて」の音便で、之を中國的に

「借ッテ」と云はず、「カレテ」と云ふのは「借レル」と云ふ下一段動詞の存在する事を意味するわけで、この點では鳥取方言は中國的でない。

鳥取方言にはかくの如く他の中國方言と異なる特徴はあるけれど、音韻現象を以ても明かな如く雲伯方言との相違は一層に大きいから姑く中國方言に入れておく。

鳥取方言の特殊な語法として、次の如き「カラ」の用法は注意すべきものである。例へば、「子供ヲ草原カラ遊バセテオル」「明日學校カラ運動會ガアル」、「草原にて」「學校にて」の意である。全縣に行はれてゐるが、西伯・日野郡に少い。

〔二〕雲伯區方言

研究・文獻　出雲は訛音の多い地方だけに訛音矯正の立場から方言研究が起つてゐる。既に嘉永の頃に中村守臣の出雲音と云ふ著述があるらしいが之はまだ發見されてゐない。明治二十一年の「出雲言葉のかきよせ」も同三十五年頃の隱岐國訛言調査書も主として訛音に關するものである。實際運動としては伊澤修二氏や高橋龍雄氏の手によつて矯正の爲の講習會などが催されてゐる、大正十五年に郷語改善會が生れた。出雲の方言については高橋龍雄氏の外に、出雲方言考の著者後藤藏四郎氏の研究や東大の國語研究室で燒けた龜田次郎氏の報告などがあるが近年、氣鋭な學者の手によつて著しく進歩して來た、その代表とも云ふべき人は濱田女子師範の石田春昭氏である。氏が中心となつて調査した「島根縣に於ける方言分布」は全國の方言書中でも最も勝れた研究の一である（氏には外に石見山間部方言と題し氏の郷里の那賀郡雲城村方言に關する著述がある）。濱田中學の千代延尙壽氏も石田氏の協力者である。出雲の

アクセントを調査した東京文理大方言研究會の大原孝道氏の研究も見るべきものであるが之は松江の男子師範に保存されて居り、同校の青木榮藏敎諭亦方言の研究者である。その他、出雲の大原郡を主として研究した加藤義成氏の調査は未だ學界には發表されて居ないが價値のあるものである。新進に岡義重・佐藤愼吉・錦織柳藏等の諸氏をあげる事が出來る。

島根縣廳でも方言調査には相當の顧慮を拂ひ昭和七年には敎育會を後援し松江で金田一氏を聘し講習會を開き其後全縣的調査を開始した筈であるが其調査成績はまだ發表されて居ない。本區方言については伯耆方面と隱岐方面との調査が未だ不十分である。この隱岐が出雲系なる事を發見したのは大田榮太郎氏の實地踏査の賜物である。

音韻と語法の特徴　特徴を記す前に一言しておきたいのは本方言區は出雲と隱岐と伯耆との三國を含んで居る事である。その出雲一國も細別すれば際限はないが飯石郡の南部の如きは全く中國系で出雲方言でないのに、石見の安濃郡の如きは反つて出雲系である。伯耆では東伯郡は寧ろ因幡に近く、西伯日野兩郡が出雲系であると云つて大過はない。隱岐も島前と島後とでは必ずしも一様とは云へない。

大原孝道氏の調査した中國のアクセントの分布圖が「方言」第二卷第三號に揭げてある、之を一見してもこの方言の特殊な分布はよく分る。氏によると出雲アクセントの行はれる範圍は舊松江藩領を主とし、石見東部の安濃邇摩の兩郡にはその延長領域と考へられる部分があり、同じ出雲國でも能義郡及び飯石郡の南半は中國一般に類するものと記されて居る。出雲アクセントは中國アクセントに似て居るが又近畿アクセントに近い點がある。卽ち、東京の上中型アクセントに屬する二音節語が近畿式に下上型となつたり、起伏式形容詞の連用形のアクセントも出雲のものは近畿

アクセントに近い。之に反し伯耆のアクセントは中國式だと云はれてゐる。又隱岐のアクセントは出雲に似て更に複雜で一層近畿的だと信じられてゐる。

出雲の音韻が東北方言のものに類似して居る事は古來有名である、例へば「ハ」行脣音が存在する事、「イエ」「シス」「チツ」の音の曖昧なる事、「クヮ」音の存在する事、「シェ」音の優勢なる事等を數へる事が出來る。爲に學者間には此兩地方の音韻現象の類似を說明せんとして種々な假說も主張されてゐる。例へば日本海沿岸一帶がもと同一な音韻狀態を保持して居たところに京都の方言が進出して之を中斷したと見る如きも其一說である。但し、東北方言と出雲方言との音韻は一致した現象ばかりでなく、其相違も勿論少くない。東北方言では語間の「カ」「タ」兩行音は法則的に有聲化するが出雲にはかゝる現象はないし、東北方言では濁音の前に鼻音の入る傾向があるが出雲にはかゝることはない。また出雲には「カ」行鼻濁音の現はれない事は一般の中國方言と同樣である。

出雲の「シス」「チツ」の混同は東北と同樣にï又はüの中間母音の存在するためで、之が各種の子音に結合して特殊な音節を作つて行く。「ス」「ツ」の音節は「シ」「チ」に近く聞える。「ハ」行の場合は脣音のFの存在によりて「Fi」「Fe」の音節が特に耳だつて聞える、之は簸川郡平田附近で最も著しい。「キ」「ク」は摩擦音を伴つて、ksi又はkfuに近い音となる。又「キューリ」(胡瓜)、「ギューニュー」(牛乳)、「チューガク」(中學)、「ウンシュー」(雲州)、「ニジュー」(二十)などが「キーリ」「ギーニー」「チーガク」「オンシー」「ニジー」に近く發音される點なども全く東北的である。

母音轉換では語頭で「イ」は「エ」に近く發音され、「ウ」が「オ」に近く發音されるので「エシ」(石)、「エマ」(今)、「オシ」(牛)「オメ」(梅)と聞える、語間にもこの傾向が優勢である(後藤藏四郎氏は「出雲にては「ウ」は「ワ」行の「ウ」のや

うに發音する」と記して居る)。雲伯方言で注意すべき音韻現象に「アウ」の二重母音を「アー」の長音とする傾向がある。「バージ」(坊主)、「カーテ」(買うて)、更に短く「ア」に發音して「ニョバ」(女房)、「メンダ」(面倒)と云ふ。之は旣に鳥取方言にも發見できるものである。二重母音「アイ」は「アエ」となり又は「エー」「エ」となる。「タエコ」(太鼓)、「ナゲ」(長い)。「ラ」行の子音が弱くある現象などは東北によく似て居る。例へば「テマー」(手毬)、「オーマシ」(居ります)。

語尾の「ミ」を撥音として「ネジン」(鼠)、「ミナン」(南)、「テガン」(手紙)など云ふ訛音は鹿兒島方言に著しいが出雲にもかなり多い。

語法の方面では先づ動詞の「借」が出雲隱岐に於ては上一段活用である事を指摘したい。之は鳥取縣では下一段活用で「借レル」と云ひ、「借リル」を混じ、西伯郡では「借リル」となつて出雲と一致する。「買」と「て」との連接は出雲は「カーテ」「カテ」で、隱岐は「カッテ」、鳥取縣では鳥取市には「コーテ」が行はれてゐるが、「カーテ」が全縣に行はれてゐる。石見では勿論「借」は四段、「買て」は「コーテ」である。四段動詞の未來形「聞かう」は出雲、隱岐は「キカー」「キカ」で鳥取縣も同樣である、しかし「起きよう」は雲伯方言では「オキョー」であるが、西伯・日野を除く鳥取縣では「オキュー」であり、石見では「オキョー」を主とし西石見で「オキュー」が現はれる。形容詞の副詞的用法では石見と因幡では「涼シューナッタ」と云ふが雲伯方言では「スズシニナッタ」「スズシネナッタ」「スズシンナッタ」「スズシナッタ」と云ふ例である。尤も、隱岐には「スズシュー」の形も行はれる。

助動詞では指定の「ダ」は因幡・伯耆・出雲・隱岐・石見を通じて行はれ、石見の西部と因幡の東部に「ジャ」が行は

れ、從つて標準形「だらう」は「グロー」とも云ふが、鳥取縣と出雲・隱岐では「ダラー」「ダラ」で、西石見だけが「ジャロー」である。「ございます」は中國は「ゴザンス」「ゴダンス」が多いが出雲では「ゴザイス」「ゴザエス」である。

過去推量形「たらう」は石見では廣く「ツロー」が使はれてゐるのに、因幡・伯耆・出雲・隱岐は「タラー」「タラ」である。

打消の過去形では「ナンダ」は行はれず「聞カザッタ」「聞カダッタ」の形が伯耆・出雲・隱岐・石見に行はれ、「聞カナンダ」は因幡と西石見の一部とにある。「聞かないで」は「聞カズニ」の外に出雲で「聞カンコーニ」「聞カンコニ」が行はれ石見に續いてゐる。

使役では中國では「掃カス」のやうな形が廣く行はれてゐるのに、出雲では「掃カセル」隱岐では「掃カスル」が多く使はれる。

敬語助動詞では出雲・隱岐には「見サッシャル」「見ナハル」「見ナハー」等が行はれるが鳥取及び石見では「見サッシャル」は使用少く「見ンサル」「見ナル」等が喜ばれる。

「下さい」に相當するものは出雲・隱岐は「ゴセ」及び「ゴサッシャイ」「ガッシャイ」「ゴシナハエ」「ゴシナエ」等、「ゴセ」の複合形である。鳥取縣では「ゴセー」も行はれるが「ツカーサイ」「ツカイ」が多く使はれ、伯耆に於て減じる。

進行時の助動詞は出雲・隱岐は「チョル」で、伯耆も同様。因幡は「ヨル」である。

助詞になると、格助詞では「鳥を」は中國では「トリュー」となる例であるが、出雲では「トリー」「トリ(オ)」「トー(オ)」と云ふ、「酒を」は中國では「サキョー」であるが之も出雲では「サケー」と云ふ。鳥取縣では、西伯が出雲と同様

で他地方は混じて使ふ。

接續助詞は理由の「から」に相當するものは出雲は「ケン」專用で「ケー」を殆ど用ひない、隱岐では「ケン」「ケニ」を使ひ、伯耆では西伯と日野とは「ケン」で東伯は「ケー」が多い、石見も「ケー」である。

出雲に特殊な云ひ方で「雨は降るけれども」と云ふ時に「降ルダドモ」又は「降ルダーモ」「降ルダゲモ」と云ふ、隱岐では「降ルダエド」「降ルダエゾ」と云ふ、石見には無いが鳥取縣には西伯と日野に「降ルダドモ」「降ルダーモ」の形がある、時に「降ルドモ」とも云ふ。「赤いけれど」は「アカエダドモ」である。隱岐に不可能を現はす云ひ方に「エモ讀マン」と云ふ表現がある、出雲では中國と同様に「ヨー讀マン」と云ふ。

第五章　四國方言

四國地方の方言は之を阿讃豫の三州の方言と土佐方言とに分けて考ふべきものと思はれる。大體に於て近畿方言に近い方言であるが中國方言の影響もかなり多い。四國方言の研究はまだ十分でないが同時に中國と四國との間に挾まれる瀬戸內海の島嶼の方言もよく分らない。嘗て藤原與一氏が各島嶼を歷訪し四國と中國との兩方言の境界線を發見せんとし其結果は「方言」第二卷第六號にのせてある。その後アクセントの方面から氏は之を再檢討してゐる。

(一)阿讃豫區方言

研究・文獻　昭和六年に四國の各縣を一々歷訪し多くの方言研究者や文獻を發見した大田榮太郎氏の四國方言資料と題する論文が「方言」第四卷第二號の四國特輯號に出て居る。詳細はそれに讓りたい。德島縣では橋本龜一氏の阿波

の方言が唯一の刊行書である。研究者としては金澤治氏をあぐべきであらう。氏の業績は大體「方言」誌上に發表されてゐる。祖谷(イヤ)の方言はよく問題とされるがさまで變つた言葉ではない、早く小杉溫邨氏によつて調べられたが阿波敎育二六六號にも掲げてある。本縣方言の語法については國學院雜誌三十七卷七號にも大田氏の論文がある。

香川縣では師範學校等が中心となつて目下、方言矯正に力を盡してゐる。研究者としては陸田稔氏がある。氏には言語地理學的な細かい調査があり、分布地圖も出來てゐる。小豆島方言については昭和八年に桂又三郎氏の手で方言集があまれた。

愛媛縣の方言研究については杉山正世氏の名をあぐべきである。氏が周桑郡に居住せられた當時、編輯した愛媛縣周桑郡鄕土研究彙報や「いよのことば」は貴重な研究資料で、丹原地方言語集と共に氏の功績を語るものである。語法については大田氏の論文が國學院雜誌三十八卷十一・十二號に南條孝國の名で掲げられ、南豫については江湖山恒明氏の研究の外に國村三郎氏の宇和島語法大略が刊行されて居る。松山方言のアクセントについては山內千萬太郎氏の調査が「方言」の第二卷第三號に見えて居る。

音韻と語法の特徴　音韻現象は大體に於て近畿方言に近い。一音節語を長呼する傾向のある事や、「アイ」の二重母音は多く其原音を保存する事や、「アクセント」の型に於ても近畿方言に近い。「クヮ」「グヮ」の拗音は近畿方言よりはよく保存され「火事」「水瓜」の如きものを「カジ」「スイカ」と云ふ事はない。「カ」行鼻濁音は阿波には分布してゐるが讃岐伊豫には中國と同樣に存在して居ない。阿波の「カ」行鼻濁音に就ては國語調査委員會の音韻調査報告書には「ぎん(銀)げんいん(原因)さんげん(三間)等ん音ニ連ナル時ハ語頭ト中間トヲ論ゼズ鼻音ニ發音スル所多キガ如シ」とある。

金澤氏も阿波語法の中に「連濁音のｇがŋとなるのは普通であるがこの國では連濁音でなくてもŋと發音する」とあるが、これには例が無いので如何なる場合を指すのかは不明である。なほ同氏は德島市附近の現象として「ハ」行の「ヒ」「フ」の發音に於て「息ヲ全部鼻ニヌキ發音スル」事を注意してゐる。「まだ居りまフンでよ」。德島縣では鼻音化の現象を精査すべきである。

音韻轉訛についてもｚ ｄ ｒ間の相通がある事、「シ」が多くｔ音の前で「ヒ」となる事、「タノシュム」(樂)「シュジュム」(沈)のやうな「シ」「ジ」が「シュ」「ジュ」となる傾向のある事、「タトム」(疊)「ナロブ」(並)のやうな母音不同化現象のある事等、近畿方言に類似してゐる。

以下、語法について述べる。

德島縣は金澤氏によれば北部の吉野川流域の平坦地を含む北方(キタカタ)と勝浦・那賀・海部の三郡を含む海岸部の南方(ミナミカタ)と美馬三好麻植郡等の山地を含む山方との三部に分れて其間に幾分の差異を存してゐると云ふ。例へば北方では「思ウカ」と云ふのに南方では「思ウケ」と云ひ、平坦地で「行クマイ」と云ふのを山地では「行キマイ」と云ふ類である。

動詞の音便は「コーテ」(買)「カッテ」(借)「ダイテ」(出)であり、形容詞の副詞形は北方で「スズシュー」南方で「スズシニ」「スヾシー」(涼)となる。指定の助動詞は「花ジャ」。また、「花ジャロー」は「花ダロー」と混用されて居る。「花ヤ」の形は海部郡にのみ行はれる。大阪の「ダス」も稀に行はれる。「ございます」には「グッス」「ゴワス」が使はれる。打消は「ン」で「見ン」「見エヘン」と云ひ、打消の過去形は「ナンダ」で「聞カナンダ」「聞カヘナンダ」「聞ケヘナンダ」の諸形が行はれてゐる。三好・美馬の山地では「ザッタ」も使用される。「泣かないで」と云ふ形は「泣カイデ」「泣カン

デ」「泣カント」と云ふが那賀海部地方には「泣カンズクニ」と云ふ形がある。敬語の助動詞は「ナハル」が普通で山地に「シャル」「サッシャル」がある。「下さい」に當るものは「ツカイ」「ツカハレ」「ツカーサイ」の外に「ハイリョー」が「致へテハイリョ」のやうに使はれる。山地には「タモレ」が保存されてゐる。存在・進行をあらはす助動詞は「トル」「ヨル」である。接續助詞では「故に」の意では「ケン」「ケニ」を主とし「キニ」「キン」が混じ、海部郡にのみ「サカイ」がある。「けれども」は「ケンド」である。格助詞では「木を」は「キュー」と音變化をする（未來で「見む」を「見ュー」と云ふ）。以上を大觀して見ると近畿方言と中國方言との兩方の影響のある事が分る。

特殊な云ひ方では美馬、三好の平坦部で對等以上の人に對して「行くデカ」（行きますか）「止めるデワ」（止めます）と、「デカ」「デワ」を使ふ云ひ方があり、之を强く云へば反語となる「彼奴が懲りるデカ」（懲りますもんか）。

また山方では祖谷（イヤ）の方言は古來、人の注意を引いてゐる。一般に山地に特殊な方言の多い事は既に述べた通りであるが、主格の助詞に「ナ」を使ひ、「足ナだいい」（足がだるい）と云ひ、「聞いたらう」は多く平地で「キイタダロー」と云ふのを「キイツロー」と云ふやうな特色がある。

香川縣も德島縣と殆ど大同小異である。例へば形容詞の副詞形では「スズシウ」（涼）よりは「スズシニ」の形が多く使用され、指定には「ジャ」が使はれ「ダロー」「ジャロー」が使はれる。其外に「ヤ」「ヤロー」も綾歌・仲多度・三豐等の諸郡で使はれる。打消の過去は「ナンダ」であるが「ザッタ」も綾歌・三豐等の諸郡にある。接續助詞は「から」の意味で「ケニ」「ケン」を主とし「キニ」「キン」をも混用し、「けれど」の意味で「ケンド」「ケド」を用ひる、三豐郡には「キンド」と云ふ訛もある。

敬語助動詞には徳島縣と違つたものがある。「御覧なさい」と云ふところを、「ミマイ」「ミーマイ」略して「ミマ」と云ひ「下さい」を「クレマイ」「クレマセ」と云ふ。「下さい」には「敎ツセテイタ」と云ふやうに「イタ」と云ふ言葉が東部に行はれてゐる。仲多度・三豐郡で「ツカー」「ツカサイ」を使ふが東の諸郡では「ツカー」の形を喜ばない。小豆島では「ツカハレ」を使ひ、また「から」の意味で「セニ」を使ふ、「休マンナランセニ」（休まなけりやならないから）。香川縣は調査が不十分でよく分らないが東部の地方と西部（仲多度・三豐）の地方と島嶼郡とに分けることが出來るかと思はれる。

愛媛縣はもと小藩の分れて居た地方だけに、方言も色々である。東豫（宇摩・新居・周桑・越智）と、中豫（溫泉・伊豫・上浮穴・喜多）と、南豫（宇和の四郡）に分ける、特に南豫は高知の影響もあつて特色がある。動詞の音便は「コーテ」（買）「カッテ」（借）「ダヒテ」（出）、形容詞・副詞形は「スズシウ」「スズシニ」「スズシ」で動詞を修飾する。指定は「ジャ」で「ダロー」「ジャロー」が推量に使はれる。宇和郡だけに「花ダス」「靜ダス」の「ダス」の形がある。「花ジャス」「靜ジャス」とも云ふ。「聞いたらう」も宇和郡では「キイツロー」と云ひ他は「聞イトロー」が多い。

「ございます」には「ゴザンス」が使はれ宇和では「ゴザス」と云ふ。打消の過去は「ナング」が多いが「ザッタ」を併用するのは東豫と大洲藩宇和島藩の一部である。「泣かないで」は「ナカイデ」「ナカズニ」の外に「ナカンズクニ」が宇和郡及其隣接地で使はれる。敬語助動詞は種々あるが「見ナハル」が多く、時に「オ見ル」のやうに接頭語を附ける。宇和では「見ナル」「見サル」「見ナス」とも云ふ。「下さい」は「ツカーサイ」「ツカー」が廣く行はれて居るが宇和では「ヤンナハイ」「ヤンナサイ」「ヤンサイ」と云ふ。接續助詞は他の二縣と變らない。「など」（等）の意味を表はすには德島香川

兩縣では近畿の「ヤコー」系の「ヤカシ」「ヤカイ」「ヤコシ」等を用ひるが愛媛では東豫の外では使はない。

宇和島は上記の如く種々變つた云ひ方をするが「だらう」の意味に「ジャロー」の外に「ヤロー」も使ひ、また「開ケルローカ」「讀メルロー」などと「ロー」とも云ふ。目上に對して「着よう」「來よう」の意味を「着ライ」「クライ」と云ふ事も注意されて居る。

以上の三縣地方の方言、特に愛媛地方には中國方言と類似點のあることは、「ケニ」「ケン」(故に)、ツカーサイ(下さい)、「ザッタ」(なかつた)の使用でも分るが、「鳥を」を、「トリュー」と云はず「起きよう」を「オキュー」とは云はない。

要するに阿讃豫區の方言には近畿方言と中國方言との兩影響を見る事が出來る。宇和島は高知の幡多方言に一致するところがあつて、或は之は次の土佐區に入れてもよいかも知れない。

〔二〕土佐區方言

研究・文獻　土佐は特殊な方言を持つてゐるので有名であるにも拘らず、從來あまり文獻のない地方である。音韻については音聲學協會々報に岩淵・服部兩氏の報告があるが、「方言」第四卷第二號・第十二號に見える佐藤仙一郎氏の論文が詳しい。外にアクセントに就ては露人ポリワノフ氏の研究があり、譯文が方言第二卷第八號に見える。

語法については國學院雜誌第三十八卷第三號に大田榮太郎氏の高知縣語法大略が載せてある(佐藤氏にも研究がある筈であるが、まだ發表されてない)。語彙では橋詰延壽氏が高知教育に連載中で五六千語になるやうである。その外に、高知縣中、異色のある幡多方言については中平悅麿氏の論文があり、高知市については、やがて土井八枝子氏

の研究が單行本となつて發行される筈である。

音韻と語法の特徴　土佐方言と云ふと誰も云ふ事は「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」との間に區別のあると云ふ現象である。之は淸音に於ても「ツ」音は $t^{s}u$ で時に tu も發音される。「ヅ」は $d^{z}u$ であるが時に du と發音され從つて「ヅ」と「ズ」(zu)との區別は明瞭である。「ジ」「ヂ」はそれほどではないが區別があり所謂、假名遣と一致し「鯨」と「痔」と「地藏」との三語が人によつて一致してゐない。「カ」行濁音は語頭語間共に g であつて鼻濁音はない。然るにこの d　g 音の前の母音は必ず鼻音化される(幡多郡では鼻音化されない)、但し z　b 音の前の母音は鼻音化されない。又、佐藤氏によると n　m 音と音節を作る場合には母音は常に鼻音化されるさうである。

土佐人は正確な發音を誇としてゐるが甚だ不思議なのは阿讃豫方言と異なり「カ」「クヮ」、「ガ」「グヮ」を區別せず大體「カ」「ガ」で發音する、但し高岡郡以西では「クヮ」「グヮ」を發音すると云ふが一般的には云へないやうである。二重母音の「エイ」は多くは「エイ」と發音される、但し「メイ」は「メー」と長音化すると云ふ。

その他注意すべき事をあげると m が b に變化する例は各地に其例が乏しくないが、土佐には其反對の「アムラ」(油)「ミョーブ」(屛風)「メッピン」(別嬪)などの例のあるのは珍しい。

「ヂ」「ジ」「ズ」「ヅ」を區別したり、「エイ」を長音化しない事や「スナハチ」(卽)の「ハ」の原音を保存するなど九州方言に似た點もあるが、一方「アイ」の二重母音を原音のままに保存したり、「セ」「ゼ」を「シェ」「ジェ」と訛らないやうな相違點もある。されぱとて、近畿方言のやうに一音節語を長呼せず、この點は阿讃豫方言と違ひ、アクセントも大體は近畿系であるが更に複雑なことがポリワノフ氏によつて報告されてゐる。土佐方言は前にも述べた通り、幡多言

葉と、東言葉(ヒガシ)(幡多郡以外の諸郡の方言)とに分れるが、アクセントに於てはこの兩者にはかなりな相違が認められてゐる。

語法から見ると、土佐方言は阿讃豫方言に比べて頗る中國方言に近い。「ヨーデ」(讀んで)「トーデ」(飛んで)の音便形、「聞カザッタ」の打消の過去形、「聞イツロー」(聞いたらう)、「見ンサル」「見ナール」「見サッシャル」(御覽なさる)、「泣カンヅクニ」「泣カンヅツニ」(泣かないで)の存在などは之を證する。

「花ヂャ」や「花ヂャロー」「花ヤロー」「花ダロー」は他と相違はないが「讀めるだらう」を「ヨメルロー」と云ふのも中國方言にもある例である。形容詞なら「無イロー」と云ふやうな云ひ方をする。

然るに一方では「ケニ」「ケン」の接續助詞を喜ばず寧ろ「キニ」「キン」を使ひ、「ケード」(けれど)よりはやはり「ケンド」を使ふ。

特殊な云ひ方としては「下さい」の意に「敎ヘテオーセ」「敎ヘトーセ」と云ひ、「屹度…だらう」の意に「濫イニカアラン」「御祭ニカアラン」と云ふ、「行く」を强めて「行くとも」と云ふ處を「イカイデ」と云ふ。

許された頁數は旣につきた。本州西部方言をこれだけの頁數に收めたので云はゞ注意事項の列擧となつたのは止むを得ないが、たゞ、單語の分布について一言も費さなかつた事特に代名詞や句尾の終助辭等、方言的特色のあるものも省いたのは申譯ない。切に讀者の御諒恕を仰ぐ。

昭和九年十二月二十五日印刷
昭和九年十二月三十一日發行

國語科學講座
（第十一回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　株式會社明章印刷所
代表者　細谷詁三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院